



ゲントク 2012 年 9 月以来のステップス二度目の個展である。一度目の個展の際には軸、パネルなどの装丁で 16 点の作品を展示した。今回は計 15 点と前回同様ではあるが、画廊の入口 1 点、事務所 10 点と、画廊内 4 点に視線が集中することに違いがある。

無論、違いは展示方法や作品のサイズのみではあるまい。前回と比較して、圧倒的に「描く」意識が深まっている。50 代の人間が、僅か三年でここまで変化するとは本当に珍しい。現代美術が人間を育む姿がここで実現されている。画風を代えられない保身の画家とは大きな違いが生じる。前は書から絵画への意向の意思が強く表れ、筆遣い、構図、墨とアクリルといった画材の特徴をどのように引き出すかに終始していた。今回の作品群は完全な現代美術で、「どのように描く」かではなく「何を描く」かに焦点が当てられている。そして、時代と人間が留められた。

今回出品された作品を見ると、例えば《那智瀧図》《山水図》《富士山登龍図》など日本の古画を思い起こし、雪村、狩野派、琳派などの個人名や流派が頭に浮かぶのかもしれない。しかしこれらの古画が過去からの因襲を前提にしていることに対して、ゲントクはゼロから出発している。つまり過去の継承を前提にするのではなく、ゲントク個人の世界に留まるのでもなく、見たことがない風景を編み出して他者に伝え、水墨画を更新する役割を果たしている。

日本において、水墨画ほど受難に満ちた手法は見当たらない。明治の黎明期、岡倉覚三らによって南画と書が追放されると共に、日本の水墨画は隅に追い込まれる。日本画でも書でもない水墨画は大学の授業の科目に登場することはなく、まるで片手間な存在のように扱われている。

しかし日本の水墨画とは、本場中国のそれに劣るどころか引けを取らない。中国の水墨画が広大な思想を携えていたとしても、中国人の友人から、日本の水墨画の崩れそうな繊細さと強靱なスピード感には圧倒されると聞いた。それぞれの国には、それぞれの良さが存在する。

中国の友人が見た水墨画が具体的にどの作品を指しているのかは定かではなくとも、確かに日本の水墨画の特徴を良く捉えている言葉である。というよりも、我々は日本の水墨画の良さに対して気が付いていないのかも知れない。ゲントク的水墨画には、正にこの水墨画が存在している。このように考えると、日本の水墨画は既にそのルーツを辿ることなく、現代美術的な「いま、ここ」の発想を携えていることが伺える。古来の力を引き出し、未来に向かって新しい姿を創造する。この作業は決して容易なことではあるまいが、ゲントクであれば、必ず来るべき日に実現することが可能であろう。

